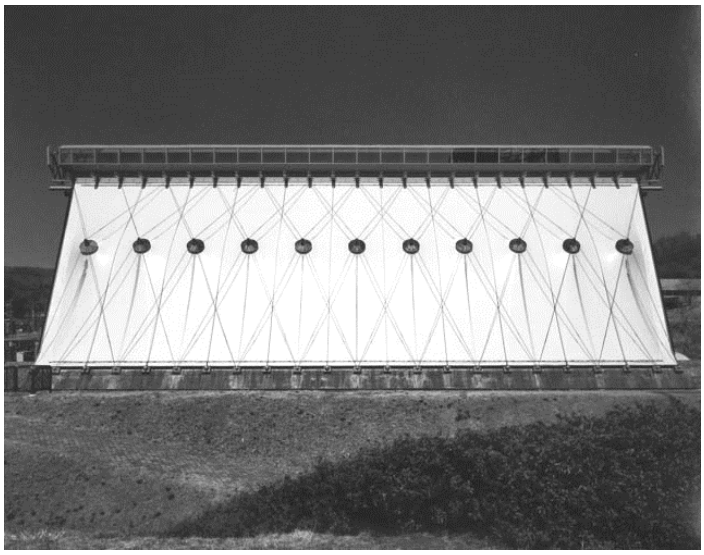
Photographic Society of
Zone System

ゾーンシステム研究会会報　Web 公開版
発行日：2016.12
発行者：中島秀雄
事務局：　畑文夫
編集部：　荒井崇

NO.62

CONTENTS

- ジュリア・マーガレット・キャメロン展を見て
- アメリカ写真事情・・・鈴木孝史教授レクチャー
- ゾーンシステム研究会写真展 20 年の歩み
  ― 研究会 20 周年記念展に展示した過去 DM ―
- インフォメーション



ジュリア・マーガレット・キャメロン展を見て

中島秀雄

19 世紀にイギリスで活躍した写真家・ジュリア・マーガレット・キャメロン展が東京丸の内にある三菱一号館美術館で開かれた。
女性写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン(1815-1876)は、48 歳で初めてカメラを手に入れ、独学で写真を始め自由な発想によって絵画的な柔らかいトーンによる人物写真を追求した。当時は、すでに水銀を扱う厄介な銀板写真(1839 年ダゲールが発明)の時代を乗り越え、コロジオン湿板写真の時代に入っていて扱いもいくらかは楽になっていた。

今回の展示で最も注目された作品は「ベアトリーチェ」だ。16 世紀イタリヤで実在した貴族の女性で、父からの乱暴がもとで父を殺害し、死刑になった悲劇の人。モデルに当時の扮装をさせてソフトフォーカスでとらえている。ベアトリーチェ本人の心の中をとらえたかのようなうつろな表情のクローズアップにひきつけられてしまう。

友人知人、姪や甥をモデルにした多くの写真の特長は、ピントをぼかしソフトフォーカスやクローズアップに物思いにふけるようなさびしい表情、レンズに細工をしたように焦点がはずされた人物写真が多くみられる。また、聖書や物語をテーマとした作品も多く、小説や演劇のストーリーの一場面をイメージしているような写真にもみえる。

三菱一号館美術館

キャメロンの肖像のスタイルに影響を与えたのは、芸術上の師だったジョージ・フレデリック・ワッツ（1817-1904、画家、彫刻家）だといわれている。ワッツはラファエル前派として活躍した画家。ラファエル前派とは、19 世紀に起きたイギリス芸術運動で、絵画をもっと崇高な道徳的なものにしようとする運動。ワッツの作品を眺めると希望、愛と人生、寓意的なものをテーマとしていることがみてとれる。

ベアトリーチェ

また、キャメロンは、上流階級の出ということもあって、当時から有名になっていた詩人のアルフレッド・テニスン(1809-1892 詩人)、トーマス・カーライル(1795-1881 イギリスの歴史家)、チャールズ・ダーウィン(1809-1882 自然科学者)、ジョン・フレデリック・ハーシェル(1792-1871 天文学、数学、化学)など、ビクトリア時代の文化人を被写体としている。

芸術、文学、科学の面で大きな功績のあった人物とはいえ 70 歳前後の人たちを対象にしているのは、単に著名人としてとらえたというより、時代や生活の中に自らに何か満たされないものがあり、その埋め合わせをしてくれるような人物としてとらえたとの評もある。カメラの前に人物を立たせることができれば、写真家は、かなり満たされた気持ちになる。

これらの写真もブレや焦点がずれた写真になっている。撮り枠をカメラにセットしてしまえば、レンズを通して被写体を見ることはできない。少しでも動けば焦点はずれてしまう。それよりも動

きや表情に集中することで人物の内面を写し取ろうとしたと見る方が分かりやすい。ブレや焦点がずれたことがかえっていきいきとした表情のとなり、人物の印象をつよめているようにも見えた。

コロジオン湿板写真法

キャメロンが扱った**コロジオン湿板写真法**とはいったいどのようなものなのか。
まず、必要な大きさのガラス板を用意し、宝石用研磨剤(ベンガラ)でよく磨く。表面に凹凸や油分が残るとコロジオン(アルコールとエーテルにニトロセルロースを溶かしたものにヨウ素を加える)が均一に塗布されない。次にアルコールできれいに洗い、小さな炎にかざして素早く乾燥させる。そして、コロジオンをガラス板の中心に流し、ガラス板を左右前後と傾けコロジオンが前面にいきわたり均一な被膜ができるようにする。余分なコロジオンは容器に戻す。次に暗室で硝酸銀溶液に 1 分つけて感光性(ヨウ化銀)をもたせ、ガラス板を撮り枠に装填し遮光する。撮り枠をカメラにセットして湿り気のあるうちに露光する。撮影時間は 5～10 秒くらいでこれは、以前の銀板写真の露光時間 1～20 分に比べると驚くほどの短時間露光だった。

撮影済のガラス板は、暗室でバットに入れ絶えず撹拌して現像する。現像液には酢酸水溶液に焦性没食子酸(ピロカゴール)を混ぜたものを使う。現像した画像をハイポ(ハーシェルの発明)で定着し、水洗して湿板ガラス用のスタンドに立てかけて乾燥させる。乾燥したガラスネガ画像は、黒い布地を裏打ちするとポジ画像(アンブロタイプ)としてみえる。

(アンブロタイプは、イギリスの科学者、フレデリック・スコット・アーチャー(1813-1857)が発見したもので、ガラスネガを黒くニスを塗った物を裏打ちするだけでポジ画像とした。)

出来上がったガラスネガは、鶏卵紙に密着プリントし金調色を施すわけだが、鶏卵紙をつくる手順もやはり複雑で次回にする。

コロジオン・ガラスネガの欠点は、何かの衝撃で割れたり、かけたりしやすい。キズをつければプリントの上にそのまま現れる。今回の展示プリントのいくつかは、ガラスネガのかけたと思える部分が画像として欠落し、またキズ、指紋などがみられた。しかし、それはかえって当時の写真制作の容易ではない処理工程の証として見ることもできる。

写真の発達期とはいえ、一枚の写真を仕上げるまでには失敗の連続だったに違いない。
確実なプリントに仕上げるためには確かなガラスネガが必要で、その後の感光紙である鶏卵紙の制作と合わせ諦めずに続けてきたキャメロンの研鑽を積む中から自らの処理手順を組み上げたのだろう。

精力的に写真に取り組んだ一人の写真家、ジュリア・マーガレット・キャメロンの写真に対する情熱を見る展覧会だった。

参考文献・講談社写真大百科事典

アメリカ写真事情

鈴木孝史教授レクチャー
「写真、所変われば評価が変わる」(2016年2月13日)

浜野次郎

日本大学芸術学部教授 鈴木孝史 (すずきたかふみ)先生の研究テーマは「表現手段としての写真術の可能性」だ。1950 年生まれ。1985～86 年に文化庁派遣芸術家在外研修員として米国プリンストン大学にてピーター・バンネル教授のもとで「現代アメリカ写真」を研究。研究と平行して写真作品を制作し、ファインアートとしての写真を理論と実践の両面から探求するプロフェッサー・フォトグラファーである。

これまでに写真作品展として

「transmogrification “FACES”」(1990 年)
「TAKAFUMI SUZUKI:PHOTOGRAPHS」(1993 年)
「アート最前線25年作家とともに-Ⅱ」(2002年)
「Beauties and Beast 展 Vol.2」(2006 年)
「鈴木孝史フォトグラフス展『I AM PHOTO-GRAPHING』」(2008 年)
「光遊録」(2015 年)
「ニューヨーク市地下鉄」(2015 年)
「New Arts Prospect from Japan」(2015 年)
「萬屋鷹伯“暗室からの報告”写真展」(2015 年)
など多数。

P.バンネル 教授

鈴木孝史 教授

論文には
「写真術(PHOTOGRAPHY)と英国人」(2011)
「黒白写真の制作を学ぶ」
(2003 年 9 月号から 40 回にわたり執筆)
などがある。

文京シビックセンターの会場にあらわれた鈴木教授はキャメルの上着に蝶ネクタイというダンディーないでたち。筆者は一瞬 A・スティーグリッツの面影を連想したが、蝶ネクタイは鈴木先生の師であるピーター・バンネルの講義のときのスタイルを踏襲しているのだそうだ。格調高い雰囲気でセミナーははじまった。

①「写真術」と「写真表現」

・皆さんよく御存知と思いますが、最初に写真術(ハード)がどのように開発されてきたかを振り返りたい。

1727 年　H.シュルツによる銀の感光性の発見
1826 年　ジョセフ・ニセフォール・ニエプス
「ヘリオグラフィー(アスファルトによる写真術)」の開発
1839 年　ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール
「ダゲレオタイプ」の開発
(ニエプスとダゲールの二人の研究により実用的な写真術がはじまる。

フランス政府による技術の公開)
1844 年　ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット
「カロタイプ(ネガーポジ法)」の開発
1851 年　フレデリック・スコット・アーチャー
「コロジオンプロセス(湿板写真)」
の開発
1888 年　「コダック No.1」の発売
1903 年　パンクロ乾板の開発
1925 年　ライカカメラ
(映画用フイルムの利用)の開発
1927 年　キャプスタッフ「D-76」現像液の開発
1931 年　電気露出計の開発
1948 年　ハッセルブラッドの初モデル発売

・次に写真表現(ソフト)がどのように進んできたかをみてゆく。
1848 年　タルボット「自然の鉛筆」
1857 年　オスカー・ ギュスターヴ・レイランダー「人生の二つの道」
1861 年　南北戦争の撮影（報道写真の広がり）
1867 年　カールトン・ワトキンス／ティモシー・オサリバンらによる西部の調査撮影
1873 年　ウィリアム・ヘンリー・ジャクソンによる西部の調査撮影
(国土の開発に写真が影響)
1897 年　アルフレッド・スティーグリッツ「CAMERA NOTES」を編集
1917 年　ニューヨークで「ギャラリー２９１」を開設
1924 年　エドワード・ウエストン「直截表現」
1931 年　「グループ f/64」の結成
1937 年　エドワード・ウエストン
グッゲンハイム賞を受賞（写真界からの初の受賞)

②「写真」とは
・写真の[製作・制作の目的]には様々なものがある。
仕事として　1. 報道　2. 広告　3. 記録
4. 芸術
趣味として=癒し(撮れたという満足感)
・[形態]　1. 作品の展示　２. 印刷物とする
・[鑑賞]にも多様なスタイルがある。
オリジナルプリントを鑑賞
1.美術館 2. ギャラリー 3. コレクション
写真集を鑑賞

③写真術をどこで学ぶか
・このあたりから日米の比較となる。
[日本では]
1.独学 2.サークル 3.ワークショップ 4.教育機関(専門学校、中等教育が中心)
[米国では]
1.独学 2.サークル 3.ワークショップ 4.教育機関(大学が中心、美術教育の一部門)
・アメリカでは写真に関するワークショップは大変ポピュラーである。
[ワークショップの例.1]
ヨセミテでの B&W のワークショップ
講師はアラン・ロス（A.アダムスの弟子)。
1 クラス 10 名。受講料 1,200 ドル(５日間)。
[ワークショップの例.2]
メイン州 B&W Darkroom Mentoring
1 クラス 12 名。受講料 955 ドル(7 日間)。

④「写真」をどう展示・鑑賞するか
[米国では]
1.ギャラリー（レンタル・ギャラリー/企画・半

企画ギャラリー/写真専門ギャラリー)
2. 美術館(公営美術館・私営美術館・大学付属美術館)などがある。
日本のようなカメラメーカーのギャラリーはない。日本の美術館における写真の展覧会は稀だが、米国ではキュレーターが企画し、一般の美術館で写真の展示がおこなわれる。

⑤何故写真作品を所有するか

・米国では写真作品を個人で購入する人が非常に多い。その理由もまた様々である。
1．写真が好きだから
2．投資として
3．投機として
(愛好家=コレクターはどのようにして写真作品を入手するか)
1. 作家からプレゼント、あるいは直接購入する
2. ギャラリーを通して購入する
3. オークションで購入する

⑥オークション(競売)について

・イングリッシュ・オークション(公開入札の一形式。入札する買い手側が価格を吊り上げながら、最終的に最も高い価格を提示した買い手に落札される方式。他に売り手が設定最高価格から順番に価格を下げてゆくダッチ・オークションなどがある)が一般的である。
・二大オークションとして「クリスティーズ」と「サザビーズ」が著名。
・米国ではオークションで盛んに写真作品が流通している。
・主催者は作品のサイズ、来歴、サインの有無、主催者側の希望価格などを予めカタログで示す。
・1 回のオークションで 3〜4 億円の売り上げ(絵画の 1/100 程度)
・希少価値のある作品は非常に高額で取引される。
例. ギュスターブ・ル・グレイ「海景」(1856)
希望価格 300,000〜500,000 ドル
ドロシア・ラング
「移住労働者の母」(1936)
希望価格 80,000〜120,000 ドル
アンセル・アダムス
「ヘルナンデスの月の出」(1941)
希望価格 30,000〜50,000 ドル

⑦写真教育に関する大学教育の現況

＜このあたりから講義の本論となる。かつて在外研修員としてアメリカで研究生活を送った鈴木教授にとって日米の教育環境の違いは圧倒的な印象があったようだ。＞

[日本では]
・総合大学のなかで専攻科目として「写真」を設置しているのは日本大学と九州産業大学のわずか 2 校のみ。

[米国では]
・4 年制大学約 1,800 校のなかで写真制作によって単位がとれる大学が 500 大学以上ある。
・ランキング上位のほとんどの一流大学では「芸術」または「美術」を専攻し、「写真」を主専攻にできる。(プリンストン大、アムハースト大など)
・プリンストン大学の例
美術専攻分野で写真が教育されている。1972 年に MOMA からピーター・バンネル氏を教授として招き、附属美術館で本格的に写真の収集を始める。マイナー・ホワイトの作品のコレクションが有名。さまざまな奨学金が集まるためローンを組まなくとも卒業できる大学として知られている。
・ウイリアムス大学の例

R・メープルソープを育てたキュレーター、サム・ワグスタッフの出身校。
・英国オクスフォード大学でも写真教育はおこなわれている。

⑧技術教育と理論教育

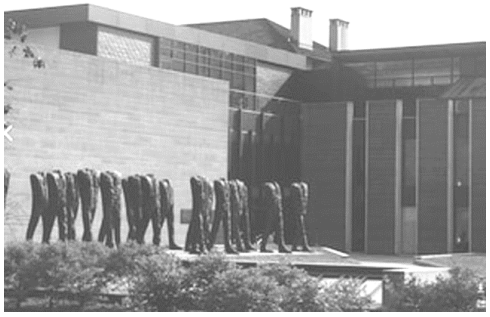
米国では芸術家を養成する教育機関と芸術史の研究者を養成する教育機関がそれぞれに充実している。

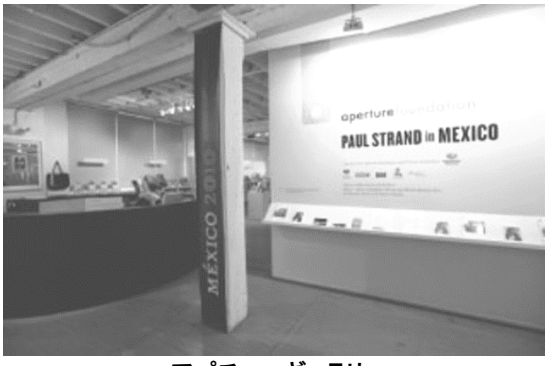
［技術教育］
芸術学専攻大学院、あるいは美術学専攻大学院を設置している大学の例
・イエール大学
・アートインスティチュート（シカゴ）
・ロチェスター工科大学
・UCLA
・ロードアイランド芸術大学(RISD)
1877 年創立。アメリカ最高の芸術大学として位置づけられている。
・スクール・オブ・ヴィジュアル・アーツ
・ベイツ大学
学生数 1,800 人の小さな私立大学。美術館があり、コレクションも充実している。
・メイン州立大学　付属美術館をもつ。

［理論教育］
芸術学及び美術学を教える大学。ハーバード大学、プリンストン大学など多数。

ソーホーフォトギャラリー

⑨ニューヨークのギャラリー
＜ここからは写真を専門とするギャラリーの話題となる。＞
かつてはソーホー地区、トライベッカ地区に集中していたが、現在はローアーイースト地区に小さなギャラリーが 200 カ所くらいできている。チャイナタウンの空き店舗がギャラリーとなっている。
［著名なギャラリー］
・ソーホー・フォトギャラリー
・アパチャーギャラリー
・インターナショナルセンター・オブ・フォトギャラリー
・ペース/マクギル
（NY の写真を扱うトップギャラリーと言われている）
・ロバート・マン・ギャラリーなど
［グループ展］
かつて鈴木教授も 6 人のグループ展をニューヨ


プリンストン大学



アパチャーギャラリー

ークでひらいた。（アショク・ジェイン・ギャラリー　ロワーイーストサイド）

⑩アーチストになるには

・米国では自分の作品をいかに説明するかが大切である。一般に日本人は自分の作品を語るのが苦手。

・ニューヨーク大学ではアーチストになるためのガイドブックを出版しており、その内容を紹介する。

1．夢は大きく-何になりたいのか、戦略を考える
2．履歴を書く
3．目標を決める
4．アクション・プラン、そのタイムラインをきめる
5．行動をおこす

【Q＆A】

○ アーチストはどうすればキュレーター(ギャラリーの企画・運営者)に評価されるか？

→キュレーターもアーチストを売り出すことで利益がでないといけない。キュレーターに気に入られるようにギャラリーとのコミュニケーションは欠かせない。アーチストは作品をつくるだけでなく、語る技術がいる。
したがって語学の力は必須。

→日本人でも杉本博司や栗田紘一郎などは上手にギャラリーにアプローチしたと思う。

→具体的には最初はグループ展に出す、アート・フェアーに出すなどの手順をふむのが一般的である。

→米国にはコレクターが多いので写真はよく売れる。グループ展でもオープニング時に半数くらいの作品が売れてしまう。

○ なぜ米国にはコレクターが多いのか?

→米国にはタックス・ディダクション(税金の控除)のシステムがあることが一点、大学で美術史の授業として写真教育をおこなっていることが一点。大学で写真について教育することにより、将来写真を買う層が厚く形成されている。卒業生が写真作品を買い、大学に寄付することも一般的である。

→日本も写真を撮らない人に写真を教える必要がある。

○ なぜ日本の美術教育のなかに写真は含まれていないのか?

→芸大には写真学科がない。昭和初期に黒田清輝が「写真(教育)は東京高等工芸学校(現千葉大工学部)でよい」としたことが、現在の状況につながっている。

○ 写真の世界を広げるには?

→米国の大学では美術教育のためにキャンパスのなかに美術館をつくる。

→美術作品のみならず、美術館そのものも卒業生の寄付であることが多い。

→写真の世界はプロ(作家)のみでは成立しない。
美術教育の根底にはキリスト教文化の流れ(構図/イコノグラフィー/図像学）がある。
日本は美術教育が決定的に不足しているため、写真評論家も育っていない。

→産業としての写真は成立しているが、文化としての写真は成立していない。
日本では写真に興味を持っている財界人も鑑賞するより写真を自分で撮ってしまう。+
米国は工業としての写真は、ほぼ撤退してしまったが、それにもかかわらず写真大国であ

る。
→早稲田大学で授業をしても「写真の撮り方を教えてほしい」、となってしまう。
→鑑賞者を増やすことが写真の世界を広げるために絶対に必要である。

以上が鈴木教授のレクチャーの概要である。

レクチャーを拝聴し、「日本の美術教育のなかに写真は含まれていない」ということの重さが伝わってきた。有り体にいえばこれまで我国において写真は「報道」と「コマーシャル」の道具であり、美的価値をもった対象として意識されることはほとんどなかった、といってよい。鈴木教授のくちぶりも心なしか悲観的なものであった。

しかしながら，最近筆者はすこし明るいきざしもあると感じている。そもそも日本人は世界的にみても美術が大好きな国民といわれている。海外からの美術展はひきもきらず、そのたびに数万人～数十万人規模の集客がある。美術館の数も全国で 1000 館を超え、数からいえば欧米諸国と肩を並べている。こと写真についてはなかなか注目されることはなかったが、ここにきて一般の美術館を会場とする写真展がすこしずつではあるが増えてきているのではないか。

たとえば今年の 8～11 月国立近代美術館での「トーマス・ルフ展」、7～9 月三菱一号館美術館での「ジュリア・マーガレット・キャメロン展」、7～8 月世田谷美術館での「アルバレス・ブラボ展」など、20 代から 30 代を中心に若い層や、私と同年代の奥様方も楽しげに連れ立って観ていた。たまたまボランティアガイドによるギャラリートークを一緒に聞いてまわった印象から、写真関連の職業人やマニアではなく、純粋に写真が好きでみにきていることがわかった（ちなみに、大判のカメラを操りフィルム現像から写真を製作すると言ったところ、筆者は驚異の眼でみられた）。彼らが米国人のようにオークションで数十万円～数百万円の写真を購入することはないだろうが、なかなかの鑑賞眼をもっていることは意外であった。

翻って考えると、Pen とかブルータスのような一般カルチャー誌が写真家を特集することや、モード系女性誌が著名な写真家を起用することも、稀ではない。インターネットを介して海外から安価に写真集を購入することも今や容易だ。昔ながらのカメラ誌やグラフ誌などからではなく、写真に親しみ、生活の一部として楽しむ層ができつつあるような気がする。

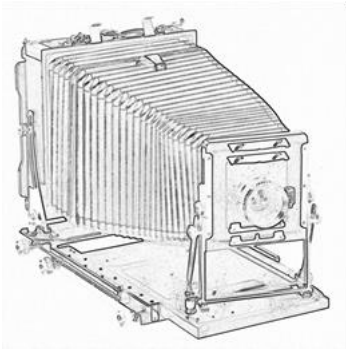
筆者の知りあいには、彫刻作家がいるのだが住宅事情の悪い日本において立体作品はなかなか売れないと嘆く。彼のつくる大きな金属オブジェは最初から売ることを想定しているようにはとてもみえない。自身はかなり大きな住居兼アトリエを所有しているのだが、そこも作品が充満して新作の置き場にこまる位だ。その点写真は収納スペースがコンパクトであり、マンションの一室にも無理なく飾れるという優位性がある。

突飛なことを言うかもしれないが、一昔まえに会社勤めの若い女性がボーナスでぽんと買う美術作品は版画であった。これがモノクロのプリントに置き換わる可能性は十分にある。写真以外で彼女たちの興味をひきそうなものは、筆者は骨董＝アンティークだと思う。それも東洋の骨董であるような気がする。写真文化をひろげるためには骨董に勝たねばならない。

思うに文部科学省が管轄する我国で、写真を教える高等教育機関を増やしてゆくみちは極めて険しいだろう。むしろ全国津々浦々に既に存在する大小の美術館が、年に 1 ヶ月でも写真展を企画してくれることが、写真文化興隆の早道ではない

だろうか。美術館学芸員を対象とする写真文化専門研修制度をどこか篤志のある企業がつくってくれないものか。

研究会においても写真を撮るだけが目的ではない。過去の名作について語りあう、あるいは相互に批評しあい、広大な写真世界に理解を深め楽しむという文系的側面を重視してもよいのではないだろうか。



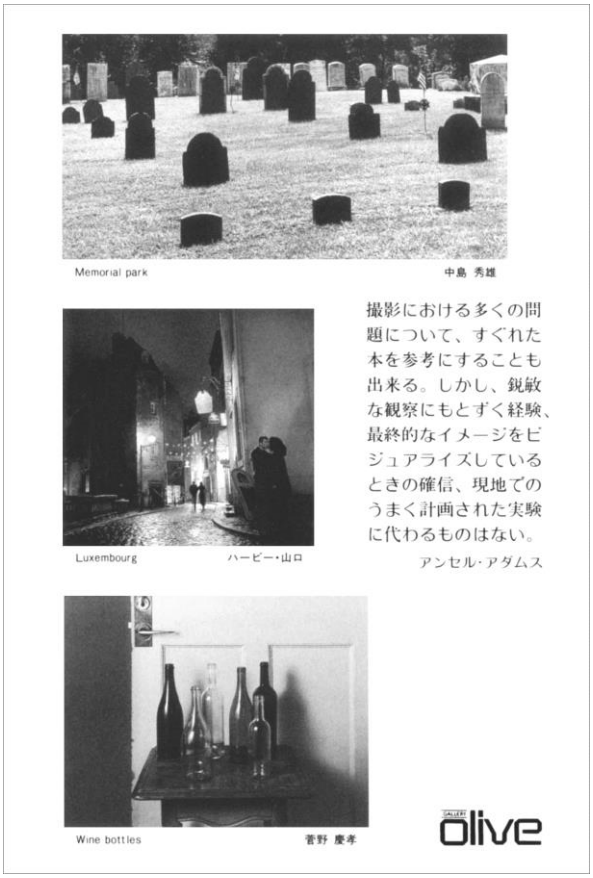
ゾーンシステム研究会写真展 20 年の歩み

－ 研究会 20 周年記念展に展示した過去 DM －

【第 1 回展(1996 年)】 ギャラリーOlive（東京代官山）

【第 2 回展(1997 年)】 ギャラリーOlive（東京代官山）

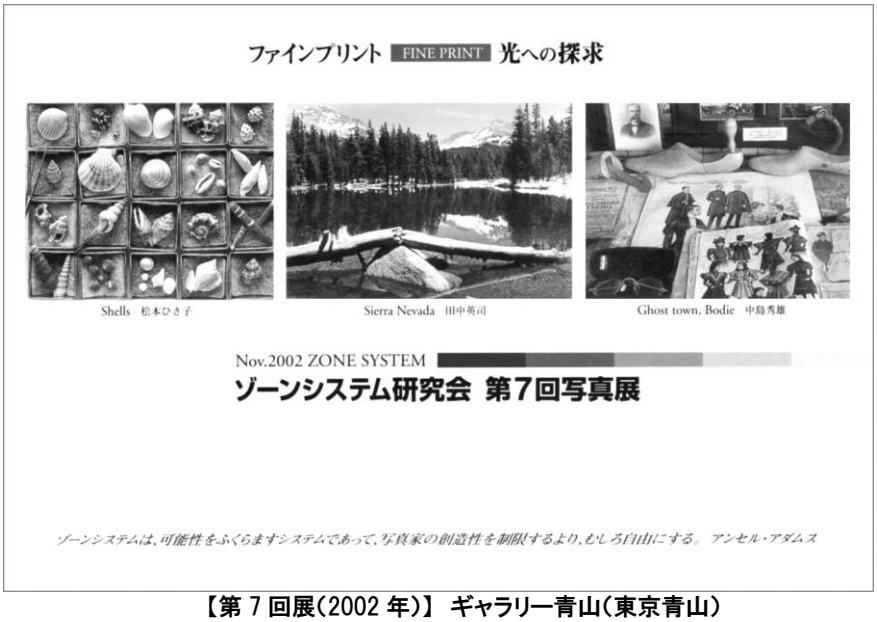
【第 3 回展(1998 年)】 ギャラリー Olive（東京代官山）



【第 4 回展(1999 年)】 ギャラリーOlive（東京代官山）

【第 5 回展(2000 年)】 東京写真文化館（東京赤坂）

【第 6 回展(2001 年)】 ギャラリー青山(東京青山)



【第 7 回展(2002 年)】 ギャラリー青山(東京青山)

【第 8 回展(2003 年)】ギャラリー青山(東京青山)

【第 9 回展(2004 年)】 ギャラリー青山(東京青山)

【第 10 回展(2005 年)】 ｱｲﾃﾞﾑﾌｫﾄｷﾞｬﾗﾘｰｼﾘｳｽ (東京新宿)

【第 10 回展(2005 年)】 ギャラリーイシス(京都)

【第 11 回展(2006 年)】 京ｾﾗ･ｺﾝﾀｯｸｽｻﾛﾝ東京(東京有楽町)

【第 12 回展(2007 年)】 ｱｲﾃﾞﾑﾌｫﾄｷﾞｬﾗﾘｰｼﾘｳｽ（東京新宿）

【第 13 回展(2008 年)】 京ｾﾗ･ｺﾝﾀｯｸｽｻﾛﾝ東京（東京有楽町）

【第 14 回展(2009 年)】 ﾌｼﾞﾌｨﾙﾑﾌｫﾄｻﾛﾝ東京(東京六本木)

【第 15 回展(2010 年)】 ｱｲﾃﾞﾑﾌｫﾄｷﾞｬﾗﾘｰｼﾘｳｽ (東京新宿)

【第 16 回展(2011 年)】 ギャラリーコスモス(東京目黒)

【第 17 回展(2012 年)】 ｱｲﾃﾞﾑﾌｫﾄｷﾞｬﾗﾘｰｼﾘｳｽ（東京新宿）

【第 18 回展(2013 年)】 ギャラリーコスモス(東京目黒)

【第 19 回展(2014 年)】
ｱｲﾃﾞﾑﾌｫﾄｷﾞｬﾗﾘｰｼﾘｳｽ（東京新宿）

【特別展（2015 年）】東川町文化ギャラリー（北海道東川町）

【第 20 回展（2016 年）】ｱｲﾃﾞﾑﾌｫﾄｷﾞｬﾗﾘｰｼﾘｳｽ（東京新宿）

Information

【トピックス 】

[ゾーンシステムワークショップ]

アトリエシャテーニュ（旧ヒットオン）にて、今年2回目のゾーンシステムワークショップが行われました。(戸部記念財団主催)

11 月 5 日（土）～11 月 27 日（日)、計 7 回のカリキュラムで開催。

今回も、ワークショップ参加者から数名、研究会に入会していただきました。

[ゾーンシステム4人展]

10 月 26 日（水）～10 月 31 日（月）ゾーンシステム４人展「銀塩ファインプリント」が行われました。メンバーは、中島代表の他、会員の越後久雄さん、北野龍一さん、藤田昇さん。会場は、南青山のギャラリーストークス。(2 月に研究会総会でレクチャーしていただいた日大鈴木教授の奥様が経営されているギャラリーです。)

それぞれの個性あふれる作品群がとても魅力的なグループ展でした。

ゾーンシステム４人展オープニングパーティーにて

Information

［表紙の作品］

・作者：川北 弘
・タイトル：tent house
・フィルム：KODAK 320TXP (TRI-X)
・フォーマット：8x10
・レンズ：210mm
・絞り：f64
・シャッター：1/4秒
・キーゾーン：テント地（Ⅶ）
・ハイライト： テント地（Ⅶ）
・シャドー：手前の草地（Ⅲ）
・印画紙：ORIENTAL SEAGAL VC-FBⅢ